

溝口弁護士を偲んで

入来院 久子



昨年の「炉ばたセイ談」(第19号)に、東京の溝口敬人弁護士の社報『そよ風通信』の中の「鎌倉時代の裁判の仕組み」を転載する形で掲載させて頂き、今回、本号では、その溝口弁護士の本題である「入来院について」を掲載させて頂きました。

ですが、皆さまにお伝えせねばならないのは、昨年秋の「炉ばたセイ談」発刊のあと、クリスマスを迎えた後に溝口弁護士は永眠されたのです。

実は、彼は癌を患っていて、その闘病中にご自分のルーツを辿って「入来院」の私にご連絡くださり、前述の原稿を託してくださっ

たのでした。

昨年、原稿をいただいて8月に上京する機会があったので、入来文書の翻訳家である矢吹晋先生と一緒に闘病中の溝口弁護士のご自宅を訪ねましたが、点滴だけの生活だったにも関わらず明るく私たちを迎えてくださり、私たちの訪問を大歓迎してくださりました。

いっぱいお喋りもさせて頂きましたし、秋には主治医を説き伏せて点滴を何本も抱えて、弟の裕太さんに介護してもらいながら入来までお越しになられたのです。車椅子をこちらで用意していたのですが、「大丈夫です！」と言い、杖も突かずに点滴の入ったリュックサックを背負いながら、しっかりと歩いて入来の麓を見学されたのには驚きました。

この世を去る前に、ご自分のルーツである本家の入来院のお墓に手を合わせたかったのかもしれない。私は入来院の菩提寺であっ

た寿昌寺跡と入来院本家のお墓をご案内させていただきました。

その後、クリスマスにお菓子を送ってくださり、お礼の電話をするとうれいな声で「入来院さん！」とお返事くださり、入来を訪問できたことを心から喜んでくださっていたので安心しておりましたが、娘さんからお聞きしたところ、帰宅後やはり無理が祟って起き上がることができなくなったようでした。

それから年明けに、葬儀が終わってから溝口弁護士の手配が届き、お預かりした「入来院について」の原稿は今年と来年の2回に分けて掲載させていただきますと娘さんと弟の裕太さんにお約束した次第です。

今から考えても、あの闘病中に入来を訪問できたというのは奇跡だと思います。それでも、私は思うのです。溝口敬人の中に眠る「入来院の侍魂」が彼をあれだけ凜として勇

ましくご自分の意志を貫いて人生をまっとうできたのだと。そうです。溝口敬人さんは、紛れもなく素晴らしい日本の侍でした。天国の溝口弁護士に、心から追悼の意を表したいと思います。



2023年8月にご自宅を訪問したときの溝口敬人氏（左端）。右端は矢吹晋氏（入来文書翻訳者、横浜市立大学名誉教授）